様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月１４日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７３０５１６
研究課題名（和文）　子どもの自律的学習と動機づけの内在化プロセスを促す家庭環境のあり方の検証
研究課題名（英文）　The role of family environment in children's self-regulated learning and internalization of motivation
研究代表者
伊藤　崇達（ITO TAKAMICHI）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：７０３２１１４８

研究成果の概要（和文）：本研究は，親の自律－他律の動機づけスタイル（Ryan & Deci, 2000）のあり方が，子どもとのかかわりや支援を通して，子どもの自律的学習（Zimmerman & Schunk, 2001; Schunk & Zimmerman, 2008）を促す，といった内在化プロセスについて検証を行うことを目的としている。当該領域の研究において，親のあり方にフォーカスをあてて詳細な検討を試みた研究は多くない。まず，大学生を対象とした遡及的調査によって，両親の自律的動機づけと子どもの学習観，自己効力感，自律的動機づけとの関連について調べた。結果として，とりわけ母親の自律的動機づけが，内在化のプロセスを通じて，子どもの学習観のあり方を規定している可能性が考えられた。次いで，大学生とその親に調査を行い，親の特性として，親自身の自律－他律の動機づけ，方略志向，学習量志向，環境志向からなる学習観について取り上げた。さらに，Grolnick, Ryan, & Deci（1991）のモデルをふまえて，自律性支援，関与，温かさ，学習支援，自己抑制支援といった多様な動機づけ支援の側面がどのように関わっているかについて明らかにした。子どもの自律的学習に関しては，自律－他律の動機づけ，反復方略，意味理解方略，メタ認知的方略の学習方略の利用に着目した。特徴的な傾向としては，動機づけ支援のうち，自律性支援と自己抑制支援がそれぞれ異なる自律的学習の側面と関連している可能性があげられるなど，親の特性や支援のあり方がいかに子どもの自律的学習のあり方と関わっているかについて一定の示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine how parents' motivational styles (Ryan & Deci, 2000) would influence children's self-regulated learning (Zimmerman & Schunk, 2001; Schunk & Zimmerman, 2008) through the parents' support, that is, an internalization process of motivation. Most previous studies have not focused on the role of family environment in children's self-regulated learning and internalization process. In the first study, the relationships among parents' autonomous motivation, children's beliefs about learning, self-efficacy, and autonomous motivation were investigated. As a result, the mothers' autonomous motivation could be thought to especially influence children's beliefs about learning through an internalization process. In the second study, university students and their parents completed questionnaires, which examined parents' motivational styles and their beliefs about learning. In particular, their beliefs on "strategy", "study work-load" and "environment" were examined. In addition, this study aimed to clarify how different varieties of parental support are related. The types of support covered in this study are "autonomous support", "involvement", "warmth", "support for learning", and, "support for self-inhibition". This study was based on the model of previous research (Grolnick, Ryan, & Deci, 1991). Children's self-regulated learning included autonomous motivation, the use of rehearsal strategy, cognitive strategy, and metacognitive strategy. The main results indicated that "autonomous support" and "support for self-inhibition" were associated to different aspects of children's self-regulated learning. Suggestions for the significant role of family environment in children's self-regulated learning are provided.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：自律的学習・動機づけ・自己調整学習・母親・父親・学習観

１．研究開始当初の背景

自律的学習のあり方は，欧米では「自己調整学習（Self-Regulated Learning）」として理論化が図られている（Zimmerman & Schunk, 2001; Schunk & Zimmerman, 2008 など）。自己調整学習に関する研究では，認知行動論の流れを汲む理論や知見が力をもっており，発達論的な視点に基づく検証はあまりなされてきていない。子ども自身の学習経験や学校教育を通じた経験のあり方も重要であるが，家庭環境の要因を無視することはできないであろう。家庭における親とのかかわりは，子どもの自己調整学習を促す形成因として重要な働きをもっていることが考えられる。

自己調整学習を支える重要な要素の１つに動機づけがある。従来の研究では，外発的動機づけと内発的動機づけの二分法で捉えられるのが一般的であったが，近年，自律性の程度に従って，外的，取り入れ的，同一化的，統合的，内発的の段階が想定され，外的から内発までの連続体で捉える理論が提唱されている（Ryan & Deci, 2000 など）。はじめは人から言われて学んでいた者が，次第にその価値を認めるようになり，自ら学ぶようになっていくプロセスは，「内在化（internalization）」の概念で説明がなされている。本研究では，親自身の動機づけのスタイル（学習に関して，外的，取り入れ的，同一化的，統合的，内発的の段階）について取り上げ，どのような支援のあり方が子どもの動機づけの自律化を促しているのか，明らかにしようとする。

２．研究の目的

本研究は，親の自律－他律の動機づけスタイルのあり方が，子どもとのかかわりや支援を通して，子どもの自律的学習を促す，といった内在化プロセスについて検証を行うことを目的としている。

親の特性として，自律的動機づけと学習観，親による動機づけ支援として，自律性支援，関与，温かさ，学習支援，自己抑制支援を取り上げて，子どもの自律的動機づけ，学習観，自己効力感，学習方略などとの関係について検討を行うことを目的とした。

３．研究の方法

(1)　親の自律的動機づけと子どもの学習観，自己効力感，自律的動機づけとの関連

大学生 403 名（男子 147 名，女子 256 名）を対象として遡及的調査への協力を求めた。

調査内容は以下のとおりである。

①親と子どもの自律的動機づけ：「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化的調整」「内発的動機づけ」の各 3 項目，計 12 項目を作成した。

②子どもの学習観：「学習量志向」「方略志向」「環境志向」の各 6 項目，計 18 項目からなる。

③子どもの学業における自己効力感：計 3 項目からなる。

これらのすべてについて「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。

(2)　親の自律的動機づけ，学習観，動機づけ支援と子どもの自律的動機づけ，学習方略との関連

大学生 179 名（男子 95 名，女子 84 名），親 172 名（男性 31 名，女性 141 名）を対象として遡及的調査への協力を求めた。

調査内容は以下のとおりである。

①親と子どもの自律的動機づけ：「外的調整」「取り入れ的調整」「同一化的調整」「内発的動機づけ」の各 2 項目，計 8 項目からなる。

②親の学習観：「学習量志向」「方略志向」「環境志向」の各 4 項目，計 12 項目からなる。

③親による動機づけ支援：「自律性支援」「関与」「温かさ」「学習支援」「自己抑制支援」の各 3 項目，計 15 項目からなる。④子どもの学習方略：「反復方略」4 項目，「意味理解方略」4 項目，「メタ認知的方略」5 項目で構成される。

これらのすべてについて「まったくあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の6件法で回答を求めた。

４．研究成果

(1)　親の自律的動機づけと子どもの学習観，自己効力感，自律的動機づけとの関連

主たる結果についてまとめると以下のようなことがあげられる。

まず，母親に関して，親の４種類の動機づけ，子どもの学習観，学業における自己効力感，自律的動機づけ（SDI＝（2×「内発的」）＋（1×「同一化」）－（1×「取り入れ」）－（2×「外発」）の数式に基づく数値），それぞれについて相関係数を算出した。その結果をTable 1に示す。

Table 1　母親の4種類の動機づけと子どもの学習観，自己効力感，SDIとの間の相関係数

	外的	取り入れ	同一化	内発的
学習量志向	.08	.17 **	.22 **	.24 **
方略志向	.05	.14 **	.21 **	.19 **
環境志向	.10 *	.21 **	.09 †	.09 †
自己効力感	.09 †	.05	.08 †	.09 †
SDI	-.18 **	-.05	.11 *	.20 **

**p<.01, *p<.05, †p<.10

母親に関して「環境志向」と「取り入れ的調整」との間に有意な弱い正の相関が認められ，「学習量志向」「方略志向」と「同一化的調整」との間にそれぞれ有意な弱い正の相関が認められた。そして，「学習量志向」と「内発的動機づけ」との間に有意な弱い正の相関がみられ，「方略志向」と「内発的動機づけ」との間には有意であるがかろうじて弱い正の相関（.19）が認められた。子どもの自律的動機づけ（SDI）と親の内発的動機づけの間には有意な弱い正の相関が示された。

次に，父親に関しても相関係数を算出した結果をTable 2に示す。

Table 2　父親の4種類の動機づけと子どもの学習観，自己効力感，SDIとの間の相関係数

	外的	取り入れ	同一化	内発的
学習量志向	.03	.17 **	.22 **	.17 **
方略志向	.09 †	.10 *	.13 **	.09 †
環境志向	.06	.19 **	.14 **	.09 †
自己効力感	.01	.01	.07	.11 *
SDI	-.15 **	-.01	.16 **	.16 **

**p<.01, *p<.05, †p<.10

父親に関して「環境志向」と「取り入れ的調整」との間に有意であるがかろうじて弱い正の相関（.19）が認められ，「学習量志向」と「同一化的調整」との間に有意な弱い正の相関が認められた。全般的に母親において相関が認められる結果となった。

子どもの「方略志向」が，親の「同一化的調整」や「内発的動機づけ」といったより自律的な動機づけと関連を示したことは予測されたとおりであったが，これらの親の動機づけの傾向は，子どもの「学習量志向」とも関わりがみられた。日本の学校の教室では，できるだけたくさんの知識を繰り返して覚えることを重視するような学習観が強調されていることが指摘されている。市川・堀野・久保（1998）は，こうした学習観を「物量主義」「暗記主義」と呼び，警鐘を鳴らしているが，本研究では，自律的な動機づけの高い親が，動機づけの内在化プロセスを通じて，こうした側面での学習における価値観の形成を促している可能性について示唆されたといえるのではないだろうか。特に母親のあり方が大きな意味をもっている可能性について示されている。

さらに，特徴的な結果として，母親でも父親でも，「環境志向」と「取り入れ的調整」とが関連している可能性が考えられた。義務感，恥や不安によって動機づけられている親のもとにある子どもは，学習の成否は環境次第によって異なってくるものと考える傾向にあることが示された。どちらというと他律的といえる親が，内在化のプロセスを通じて，子どもに対し，外の力に頼むような，環境重視の学習観の形成を促す可能性について考えられるかもしれない。今後さらに具体的にどのような親の働きかけが子どもの学習観の形成を規定しているかについて，発達の視点を踏まえて検討していく必要があるだろう。

(2)　親の自律的動機づけ，学習観，動機づけ支援と子どもの自律的動機づけ，学習方略との関連

第一次的な分析結果に基づくものであるが主なものについてまとめると以下のようになる。

親の特性のうち方略志向の学習観と子どもの自律的動機づけと意味理解方略の使用との間に正の関連が示唆された。効果的な学び方を重視する考え方をもつ親の子どもは，自律的動機づけが高く，意味の理解に努めるような学習方略をとっている可能性が考えられる。

また，親の環境志向の学習観と子どものメタ認知的方略の使用との間に正の関連が示唆された。適応的な学習観であるとは考えにくい環境志向が関わっていることについて今後さらなる検討が必要かもしれない。

動機づけ支援のうち自律性支援と子どもの自律的動機づけとの間に正の関連が示唆された。一方で，自己抑制支援とメタ認知的方略の使用との間に正の関連が示唆された。自らの欲求をセルフ・コントロールすること

を支えてもらうことがメタ認知的なコントロールと結びついている可能性が考えられるかもしれない。これらの結果は，多様な動機づけ支援がそれぞれ異なる自律的学習の側面と関連している可能性を示唆するものといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①伊藤崇達，親の自律的動機づけと子どもの学習観，自己効力感，自律的動機づけとの関連，京都教育大学紀要，査読無，118 号，2011，9－16

〔学会発表〕（計３件）
①伊藤崇達，自己調整学習の支援―家庭学習に着目した研究と実践―，日本教育心理学会第 52 回総会，指定討論，2010，早稲田大学
②伊藤崇達，学習支援研究の可能性と課題―支援ニーズを適切にくみ取る論理と方法論―，日本心理学会第 74 大会，話題提供，2010，大阪大学
③ ITO TAKAMICHI, The relationships among parents' autonomous motivation, motivational supports, and children's autonomous motivation, International Congress of Applied Psychology, 2010, Melbourne, Australia

〔図書〕（計３件）
①伊藤崇達,「自ら学ぶ力を支えるもの」,『よくわかる学校教育心理学』（森 敏昭・青木多寿子・淵上克義（編），ミネルヴァ書房），2010，116－117
②伊藤崇達,「動機づけ―やる気のメカニズム―」『発達・学習の心理学』（柏崎秀子（編），北樹出版），2010，110－122
③伊藤崇達,『［改訂版］やる気を育む心理学』（改訂版の編著者として，北樹出版），2010

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　崇達（ITO TAKAMICHI）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70321148